

オーレオマイシンによる樹枝状 角膜炎の 1 治験例

金沢大学医学部放射線医学教室(主任平松教授)

専攻生 清水 貞子

(昭和31年2月20日受附)

A Case of the Keratitis Dendritica treated by Aureomycin

Sadako Shimizu

From the Radiological Department of the Medical
Faculty in Kanazawa University

(Director : Prof. H. Hiramatsu, M. D)

緒 言

樹枝状角膜炎は、臨床上屢々遭遇する疾患で、これに対しては既に多数の人々によつて種々の療法が挙げられていた。なお、コーチゾン並びに各種の抗生剤が発見されて以来は、これらも本症に対して盛んに用いられ、その治験報告が

多く見られるようになった。而して、私は、最近、オーレオマイシンの点眼、内服併用が本症に著効を示した症例を経験したのでここに追加報告する。

症 例

患者： 生後1年6カ月の男児。

初診： 昭和31年1月4日。

既往歴： 患者は9カ月の早産児で母乳に人工栄養を補給して養育された。生後著患を知らない。昨年秋頃右眼をまぶしそうにしたので医治を受けたところ2、3日で全治した。1週間程前から再び同様の症候が見えたので、前医の治療を受けたが次第に増悪するので転医して輪島病院を訪れた。

現症： 全身所見として、体重7.5kg、皮下脂肪の発達悪く、顔面は蒼白である。発熱その他全身に異常を認めない。血液ワッセルマン氏反応及びマンロー氏反応は(-)である。眼所見としては、左眼に異常を認めない。右眼には軽度の眼瞼浮腫が見られ、羞明強く瞼裂は自開困難なようである。角膜ではその9時の部位から瞳孔中央に達する直線状の溷濁と、これから瞳孔縁あたりで下方6時に向つて分岐する同様の溷濁と

を認める。而して、後者の先端は角膜縁の近くまでのびている。いずれもフルオレスチン可染で、精査すると更に両方の線から短い枝を生じていることが知られる。角膜の知覚は多少鈍麻しているように思われる。結膜では、角膜の9時の部位に接する球結膜に限局性の充血を認める。眼脂、流涙はなく、結膜囊からの塗抹標本で細菌を証明しない。

診断： 樹枝状角膜炎

療法並びに経過： 第1日には、0.5%のアトロピン溶液の点眼と1.5%のコーチゾン眼軟膏の点入とを行い、パンピタンの内服と0.5%のコーチゾン点眼液の頻回点眼とを命じて帰宅させた。第2日には、瞳孔は中等度より少し大きく散大し、角膜の溷濁は前日より太くなつていた。第3日には、角膜の線状溷濁は、これを縦軸とした楓の葉形の潰瘍となつていた。第4日には、潰瘍は更に内下方に拡大して舌状を呈し、幾

分か深くなつたように見えた。第5日には、更に潰瘍の増大とアトロピンの効力減退を示し、羞明も著しくなり、瞼裂は自開不能であつた。而して、これまでは第1日と同様の療法をつづけていたのであつたが、この日から、局所療法を改めて、0.5%のアトロピンワゼリンと1%のオーレオマイシン眼軟膏との点入を行うこととし、自宅では0.5%のオーレオマイシン点眼液の頻回点眼を命じた。しかしながら、それからなお潰瘍は少しづつ増大をつづけた。よつて、10日目には従来の局所療法に加えてオーレオマイシン1日250mgの内服を始めた。而して、第12日は(第11日は

来院せず)、角膜潰瘍は進行を停止したかのように見えた。第13日には、明らかに潰瘍の進行停止が認められ、アトロピンの作用も以前よりは強くなつていた。第14日には、角膜下縁の球結膜に限局性の充血を見、羞明は多少軽快したようであつた。第18日には、室内で瞼裂自開可能となり、潰瘍の著しい縮小を認めた。第21日には、角膜のフルオレスチン可染の部分が消失し、その溷濁も余程淡くなり、羞明は更に軽快して来た。同日オーレオマイシンの内服を中止し、パンピタン内服のみを継続させることにした。以後1回も悪化することなく治癒に向いつつある。

考 接

オーレオマイシンは広い抗生スペクトルを有し、各種のウイルス性疾患にも有効とされている。従つて、ヘルペスウイルスによつて発せられるといわれる樹枝状角膜炎には大抵の場合一応はその使用が試みられているようである。本邦最近の文献によれば、オーレオマイシン点眼の奏効した報告としては、蜂谷の1例があり、その無効であつた症例では、山田、小林、佐藤、野村、白紙、八田及び中村、渡辺等比較的多くの報告が見られる。

益田は、家兎に生ぜしめた痘苗性角膜炎に対してオーレオマイシンその他の抗生物質溶液の点眼を試みたがいずれも無効であつた、と述べて、抗生物質のヘルペス性角膜炎に対する効力過信を警告している。

オーレオマイシンの点眼と内服の併用が奏効した症例には、柏井、村山、内服のみによつて効力が認められたものには、高橋の夫々報告がある。

又、本剤を、内服・点眼併用しても無効であつた症例には、村山、平林の報告がある。

さて、本症には、一般角膜潰瘍の治療法とサリチル散剤の内服によつて1~2週で全治するものもあるが、その治療法に工夫を凝らしても潰瘍の一進一退すること数カ月に及ぶような場合が多い。一般に、年少で全身の栄養状態の悪いもの程難治なように思われる。

本例では、発育栄養共に不良の患兒であつたが、はたして、ビタミンの内服と共に、コーチゾン次いでオーレオマイシンの頻回点眼等にもかかわらず症状は急速に悪化していつた。しかるに、オーレオマイシンの点眼と共に内服を行うことによりその症状の著しい好転を見、以後一回も悪化することなく治癒に向つたのである。よつて、この場合は内服又は内服、点眼併用が奏効したものであらうと考えられる。

柏井は、そのオーレオマイシンの内服、点眼併用が著効を示した報告の中で、その内服について大体次のようなことを述べている。即ち、オーレオマイシン内服により、その血中濃度が常に高まり、組織への拡散がすみやかな状態となり、局所投与によつて眼組織への拡散が倍加されて十分な抗菌作用を発したものと思う。又一つには、ヘルペスは一般にlatentに全身感染をなし、なんらかの非特異的因子によつて活動化されると考えられ、この論拠としての血液、脳脊髄液、神経節、口腔、皮膚等におけるウイルス証明は成功している。従つて、局所投与によつて達し得ない深部病巣から絶えず病源の局所到達があることも推察され、局所投与によつて効力のない時には全身投与を行うべきであると考えられると。

私の症例においても内服が奏効した理由は上記と同様に考えてよいと思う。

又、小林は、クロロマイセチンの内服、点眼併用により難症な樹枝状角膜炎を治癒せしめた症例を報告し、内服奏効について柏井と大体同様の考察を試み、更に、凡そ次のようなことを述べた。即ち、抗生スペクトルの広い、抗生物質は、随伴した混合伝染又は他の全身疾患（インフルエンザ、マラリヤ、腸チブス等）に対して有効に作用し、組織の抵抗力を向上せしめて、角膜炎の治癒を促すということも考えられるが、彼の症例では混合伝染も全身疾患も認められなかつた。故に、クロロマイセチンがヘルペスビールスに直接有効に作用したものと考えられると。

私の症例においても矢張り混合伝染や全身疾患の随伴は否定出来ると思う。よつて、オーレオマイシンがヘルペスビールス自身に作用したものと認めてよかろうと考える。

オーレオマイシンと同様の抗生スペクトルを有するものに、クロロマイセチン、テラマイシン、アクロマイシン等がある。いずれもオーレオマイシン同様に本症治療に用いられている。しかし、テラマイシンが奏効したという報告は私の調べたところでは1例しかなく、水川は、テラマイシンは特に本症に対して有効であるとは思われないと述べている。

クロロマイセチンについては、上記小林の全身並びに局所投与による奏効例の他に、堀内の局所投与による治験例の報告がある。

アクロマイシンでは、佐藤による点眼の本症に有効であつた報告が見られる。

結 論

オーレオマイシン内用、点眼併用により著効を奏した樹枝状角膜炎の1例を報告し、これについて多少の考察を試みた。

その他、ストレプトマイシンの全身並びに局所療法も行われている。那須、野村は、オーレオマイシンの内服・点眼併用が無効でストレプトマイシンの全身並びに局所療法が著効を示した症例を夫々2例ずつ述べている。

更に最も普及率の高いペニシリンの注射も屢々試みられているが、一般に効果はないようである。

以上の報告例によつても知られる通り、本症に対しては同一抗生剤の作用が症例によつて著しい相違を示し、又、ストレプトマイシンの如きはその抗生スペクトル中に抗ビールス性を有しないとされているにもかかわらずオーレオマイシンが無効の場合に著効を奏したりする。その原因については、前者に対しては、

抗生剤がヘルペスビールスに直接作用すると同時に、これを活動化させる非特異性因子にも効力を及ぼした場合、又は、抗生剤の投与がヘルペスビールス活動の抑制に対して時期的にも量的にも適合された場合に著効を奏する。

後者に対しては、

本症発病に非特異性因子が特に強く働いていたような時に、これに対してストレプトマイシンが有効に作用した。

等のことも想像される。しかし、ビールスの本体が充分研究しつくされていない今日では、それ以上の推察は困難なように思われる。要するに、本症の決定的な療法を確立するには、ビールス本体究明の成果を基礎としてなお臨床的にも研究を重ねる必要があると考えられる。

稿を終るに当り、平松教授・倉知教授並びに宮村講師の御校閲に対し厚く御礼を申し上げます。

主 要 文 献

1) 大林・西田：樹枝状角膜炎，眼臨，47,747，昭28.

2) 大野：難治なりし樹枝状角膜炎

の1例，眼臨，48，200，昭29.

3) 尾渡：

樹枝状角膜炎の1治験例，眼臨，48，672，昭29.

- 4) 柏井：オーレオマイシン内服によるヘルペス性角膜炎の治験例，眼臨，46，744，昭27。
- 5) 越生：樹枝状角膜炎とストレプトマイシン及びイルガピリン使用経験，眼臨，48，665，昭29。
- 6) 小林：樹枝状角膜炎に対するクロマイセチンの治療効果，眼臨，49，600，昭30。
- 7) 佐藤：樹枝状角膜炎に対するアクトマイシン応用，眼臨，49，776，昭30。
- 8) 白紙：興味ある経過を示したヘルペス性角膜炎の1例，眼臨，49，947，昭30。
- 9) 高田：樹枝状角膜炎の1例，眼臨，43，752，昭29。
- 10) 高橋：樹枝状角膜炎のオーレオマイシン内服治験例，眼臨，49，943，昭30。
- 11) 那須：ストレプトマイシンの奏効した樹枝状角膜炎の2例，眼臨，48，昭29。
- 12) 布村：樹枝状角膜炎の沃丁療法，眼臨，49，856，昭30。
- 13) 野村：ストレプトマイシンの奏効した樹枝状角膜炎の2例，眼臨，47，418，昭28。
- 14) 八田・牛村：蒼鉛軟膏の奏効したヘルペス性角膜炎，眼臨，46，234，昭27。
- 15) 蜂谷：樹枝状角膜炎の治験例，眼臨，49，385，昭30。
- 16) 平林：樹枝状角膜炎から再発前房蓄膿性虹彩炎に移行した症例，眼臨，48，663，昭29。
- 17) 東：樹枝状角膜炎の1治験例，眼臨，48，669，昭29。
- 18) 堀内：樹枝状角膜炎に対するクロマイ軟膏の効果，眼臨，48，343，昭29。
- 19) 益田：樹枝状角膜炎により分離したヘルペスウイルスのマウス脳内接種実験並にその抗生物質による影響，眼臨，47，19，昭28。
- 20) 益田：実験的ヘルペス角膜炎に対するコーチゾン，シソコルタ（DOCA）の作用に就て，眼臨，47，43，昭28。
- 21) 水川：ヘルペス性眼炎，臨眼，6，644，昭27。
- 22) 矢ヶ崎：難治な樹枝状角膜炎の1例，眼臨，48，279，昭29。
- 23) 山田：樹枝状角膜炎の1治験例，眼臨，48，358，昭29。
- 24) 渡辺：オーレオマイシンを使用せる樹枝状角膜炎の1例，眼臨，46，279，昭27。
- 25) 若山：興味あるヘルペス性角膜炎の1例，眼臨，48，367，昭29。